

研究ノート

実社会を舞台とした建築デザイン実践教育の意義

～7つの事例を俯瞰して～

向井正伸

要約

多くの地域では人口減少や経済の停滞など諸問題に直面し深刻さを増す中で、地方創生の一助として建築や都市空間に寄せられる期待も大きい。北広島市ではボールパーク「Fビレッジ」が2023年3月に開業、今までになかった人の流れができ、街そのものが壮大な社会実験の場となっている。そのような中、星槎道都大学美術学部建築学科の教員として着任してから約3年間、北広島市を拠点に学生と共に実践的なプロジェクトに取り組んできた。プロジェクトの用途や地域も様々あり一貫性は見出しづらいものの、一つ一つは社会に実装されることを前提とした取り組みであり、そのデザインプロセスも含めて事例を整理し、俯瞰することにより、実践的教育の意義を明らかにしたい。

1. はじめに

建築デザインは、オーナーや施工者、利用者や地域社会など、建築に関わる様々な人に受け入れられることによって、その真価が発揮される。この理解を深めるため、多くの建築系大学では建築デザインを学ぶために様々な演習科目を用意しており、本学では建築設計演習Ⅰ～Ⅵ、卒業設計等がある。この授業は、教員、あるいは学生自ら設計を行うための条件を設定し、机上で建築デザインをおこなう課題である。担当教員は学生のデザインに批評やアドバイスを加えて、改善点を共有する。我々教員は、時に建主やユーザー、施工者・地域の人々の代弁者となって要望や課題を学生に伝える役割も担う。設計の過程で学生と教員の対話を繰り返すことにより、学生は建築デザインに関わる種々の技術的課題、地域風土や生活等、多面的な検討を加え建築デザインを深化させる。これが本学における建築設計演習の大まかな流れであり、他の大学も基本的には同様であろう。建築

設計演習はあくまで仮想な課題であるために、実際の建築プロジェクトで直面するような複雑で多岐にわたる要望や構造・施工・環境に関わる技術的課題、コストの問題や建築基準法他の法的課題などはある程度スキップしながら、建築デザインを行うのが一般的である。

設計演習科目は、建築デザインの創造的な部分に時間を費やすことができる一方で、大学卒業後に実務で行う検討の複雑さや業務量の多さから、そのギャップに悩む人も少なくない。また、建築設計演習では実空間の持つダイナミズム、実現することによって得られる大きな達成感、責任感も感じにくい。

一方で、大学の外に目を向けると、地域では人口減少や経済の停滞など地域課題は深刻さを増しており、その状況を打開する方法の一つとして、建築や都市空間デザインに向けられている期待も増してきているように感じる。北広島市ではボールパーク「Fビレッジ」が2023年3月に開業、今までになかった人の流れができ、街そのものが壮

大な社会実験場のようなものである。

私は本学に着任してから約3年間、この北広島市を拠点に、地域の実課題を題材とした実践教育として、学生と共に各プロジェクトに取り組んできた。本稿では今までに取り組んできた建築デザイン実践教育の事例を整理し、俯瞰することにより建築デザインにおける実践教育の意義をまとめたい。

2. 建築デザイン実践教育の定義

本稿では、「建築デザイン実践教育」を、伝統的な建築設計演習の枠組みを超えて、より実践的なアプローチを組み込んだ教育手法として扱う。従来の建築設計演習では、学生は与えられた設計条件（例えば未活用の土地を使ってその用途や規模を指定するなど）をもとに主体的に設計に取り組むことが一般的であるが、実際の施主やエンドユーザーの具体的な要望に基づき、建設を見据えた設計を行うことは殆どない。そこで、一般的な建築設計演習では扱わない実践的条件として、以下の条件のいずれかを含むプロジェクトを建築デザイン実践教育と定義する。

実践① 実際の敷地や建物を対象とし、実施を想定したプロジェクトである。

実践② 建主や地域住民など 学生・教員以外へプレゼンを行う。

実践③ 1/1 スケールで考える。自ら施工も行う。

3. 建築デザイン実践教育に期待すること

建築デザイン実践教育は、設計と条件をもとに設計・デザインを行う点において、一般的な設計演習と同様であるが、現実の諸問題と向き合い提案を行うことで、より実践的スキルの体得を目指した。特にプレゼンテーションスキルの獲得に重点を置いており、学生たちは自らの提案を建物のオーナーや地域住民に伝えることに主眼を置くことで、地域やオーナーのニーズを汲み取ること、魅力的で色褪せないデザインの検討、提案をまと

めるデザインスキルなど、そこに付随する様々なスキルの体得につながると考え、指導をおこなった。また、デザインしたものが工事を経て完成、そして空間を体験することも、実践教育の醍醐味である。実空間の体験を通じた空間デザインの体得、実現することによる感動を経験してもらうことは、大学生にとって得難い経験である。

実践教育による様々な経験を通して、空間を創造することの喜び、そして社会で通用する学びを得られることを期待し、様々なプロジェクトに取り組んできた。

4. 建築デザイン実践教育 事例

4-1. マンションデザインプロジェクト 第一弾

北広島市に建設する5階建て賃貸マンションの外壁・内装をデザインするプロジェクトである。このプロジェクトは本施設のオーナーで本学OBでもある不動産企画会社パーフェクトパートナー株式会社 岡田執行役員より、活きた学びの機会を提供したいという思いから学生にデザインオフアワーをいただき始動した。そこで、学生がデザイン案を複数案作成、その中から採用案をオーナーで選ぶコンペティション形式を採用することとした。建築学科全学年を対象に、コンペ参加希望者を募り、工事進捗状況に遅れが生じないようにスケジュールに配慮しながら、模型やデザイン案を作成、学内コンペ等を経た優秀案を、模型やプレゼンボードを用いてプレゼンさせていただいた。その結果、外装案2案、そして内装は10案全てを採用いただいた。その後、使用材料とその範囲を現場へ伝達し、現場は無事竣工し、現在 学生や社会人の住まいとして供用されている。北広島市はボールパーク効果で賃貸マンション需要が高まっており、未来の住人のライフスタイルに想いを巡らせ、デザインを行なった。活動はTVや北海道新聞などの各種メディアに取り上げていただいた。

□プロジェクト概要

・場 所：北広島市



図 1-1 学生（庭山 愛由 当時 1 年生）によるスケッチ案



図 1-2 3DCAD を用い、景観デザインを検討



図 1-3 竣工した建物の外観写真



図 1-4 近隣の類似施設を見学し、内装デザインを検討



図 1-5 竣工した内部 エントランス内部はデザイン学科学生が壁画を製作



図 1-6 プレゼン後の TV による取材写真

- ・施主：パーフェクトパートナー株式会社
岡田執行役員
- ・施設用途：賃貸マンション
- ・施設規模：RC 5 階建て
- ・プロジェクト期間：2021 年 9 月～2 月
- ・プロジェクト内容：マンションの外装・内装デザイン
- ・参加学生：建築学科 1～4 年生 計 21 名
- ・作業内容：模型制作，現地調査，類似施設見学，外装材の選定・デザイン，内装材の選定・デザイン，施主へのプレゼン

□実践教育の内容

実践① 実際の敷地・建物を対象としたプロジェクト

→施工を前提とし、周辺を踏まえた景観デザインや、コストや維持保全といった要素も加味しデザインを検討。

実践② 建主や地域住民など 学生や教員以外の第三者へのプレゼンを行う。

→模型やプレゼンボードを用いて建主へプレゼンを実施。

実践③ 1/1 スケールで考える

→敷地周辺を歩き、街を体感。また実際の建築材料を取り寄せ、実物を見ながらデザインを検討。また類似施設を見学し、リアリティあるデザインを検討。

4-2. マンションデザインプロジェクト 第二弾

2021 年に取り組んだマンションデザインプロジェクトの第二弾として小樽に建設する 5 階建て賃貸マンションの外壁・内装を提案させていただく機会をいただいた。前回は、スケジュール的な問題から授業カリキュラムに組み込むことができなかったが、今回は 2 年生対象のアクションプログラムⅢに組み込むこととした。

今回は学生のデザイン検討に先立って実際にインテリアデザイナーの橋谷のり子先生に特別レクチャーをいただくこととなった。事前に岡田執行役員・橋谷先生・筆者で複数打ち合わせを行い、工事に遅延が発生しないようにしながらも、学生



図 2-1 橋谷のりこ先生によるレクチャー

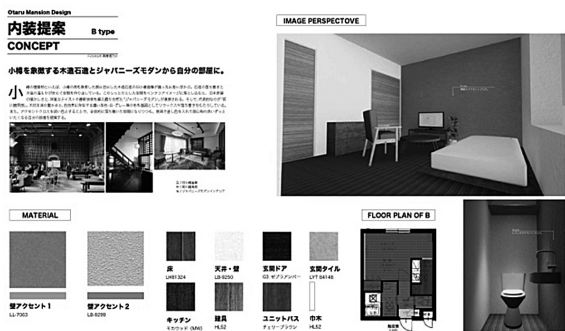


図 2-2 学生(高橋 遼乃介 4年生)が作成した内装プレゼンシート



図 2-3 学生(砂澤 孝多郎 2年生)が作成した外観パース



図 2-4 授賞式の様子 採用案作成者には賞金も手渡された



図 2-5 2024年1月末に無事竣工, 小樽の景観に彩りを添えている

が無理なく提案を行えるよう授業スケジュールを組み立て実施することとした。学生は、橋谷先生の様々な経験に裏打ちされた考えやスキル等のレクチャーを受け、デザインに対する理解を深めた上でデザインを検討することが可能となった。このプロジェクトには2年生17名、3年生3名、4年生2名が参加し、内装提案17案、外装提案8案が提出され、岡田執行役員や橋谷先生へのプレゼンを経て、採用案が決定された。建物は2024年1月末に無事完成し、学生を対象とした完成見学会も実施された。小樽の街並みに調和しながらも、美しさが際立つ色彩が、景観に彩りを添えていた。このプロジェクトは北海道新聞、北海道住宅産業新聞などでも取り上げていただいた。

□プロジェクト概要

- ・場 所：小樽市
- ・施 主：パーフェクトパートナー株式会社
岡田執行役員
- ・施設用途：賃貸マンション
- ・施設規模：RC 5階建て
- ・プロジェクト期間：2023年4月～7月
- ・プロジェクト内容：マンションの外装・内装デザイン
- ・対象学生：建築学科 2～4年生 計22名
- ・作業内容：橋谷先生特別レクチャー計3回を経て、外装材の選定・デザイン、内装材の選定・デザイン、プレゼンボード作成、施主へプレゼン

□実践教育の内容

実践① 実際の敷地・建物を対象としたプロジェクト

→施工を前提とし、周辺を含めた小樽の景観、歴史も踏まえ、コストや維持保全といった要素も加味しデザインを検討。

実践② 建主や地域住民など 学生や教員以外の第三者へプレゼン

→模型やプレゼンボードを用いて建主・そして橋谷先生へプレゼンを実施。

実践③ 1/1スケールで考える

→小樽を調査し、景観デザインを検討。建築材料を取り寄せ、実物を見ながらデザインを検討。

4-3. 中標津リノベーションプロジェクト

中標津町では今後懸念される空き家対策を行うために中標津町空家等対策協議会を設置、本学安藤学部長が当協議会会長として携わっているご縁から、町内に増加する空き商店の利活用方法の検討等を依頼された。筆者が中標津町出身であったこともあり、向井ゼミに所属する2年生（基礎ゼミ生）及び3年生とともに、地域のリサーチや建物オーナーへのヒアリング、活用方法の検討からデザイン立案まで行うこととした。

中標津町は根釧台地の中央に位置した酪農の街で、空港もあるため、周辺市町や観光客も集まる活気ある街であるが、郊外への大型店舗出店もあり、街中心部に空き店舗が目立つようになった。ただ商店街は街中心部に位置する地理的メリットがあり、ビジネスホテルや飲食店も多く、町民や観光客も立ち寄りやすい高い場所でもあるため、そのポテンシャルを活かし、個人活動が活発化する現代社会にフィットするような利活用方法と空間デザインの両方を学生たちと考え提案を行なった。提案は Teams によるオンライン形式、中標津町役場職員や建物オーナー、町民にプレゼンさせていただき、各案に対する意見や感想を直接いただくことができた。この提案は北海道新聞や釧路新聞で、取り上げていただいた。

□プロジェクト概要

- ・場 所：中標津町
- ・オーナー：株式会社リサイエ
- ・施設用途：商業施設
- ・施設規模：木造2階建て
- ・プロジェクト期間：2022年10月～2023年2月
- ・プロジェクト内容：空き店舗の用途及びデザイン検討
- ・対象学生：向井ゼミ所属 2年生・3年生 計28名
- ・作業内容：現地及び周辺リサーチ、建物オーナーへヒアリング（3年生のみ）、利活用方法・デザイン検討、オーナー・役場・町民へプレゼン



図 3-1 対象となった空き店舗の写真と立地

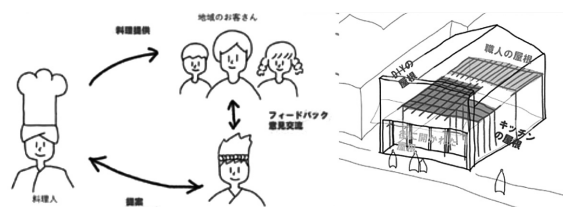


図 3-2 地域の人・モノ・コトとつながる利活用方法の提案例



図 3-3 空間デザインの提案 — 新たな創作スペースの提案



図 3-4 空間デザインの提案 — スタディスペースの提案



図 3-5 Teams を活用した発表会の様子



図 3-6 発表会の中標津会場「コワーキングスペース milk」の様子

□実践教育の内容

実践① 実際の敷地・建物を対象としたプロジェクト

→中標津や商店街の立地特性を踏まえたりサーチし、活用方法を検討。実施を前提としたプロジェクトとし、運営方法も含めた提案を行った。

実践② 建主や地域住民など 学生や教員以外の第三者へのプレゼンを行う。

→建物オーナーや町民へプレゼンを実施。

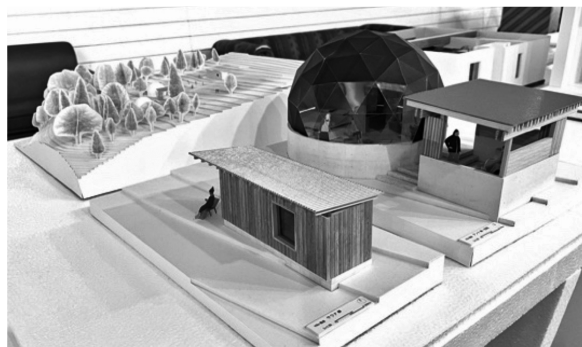


図 4-1 展示会用模型を製作（横浜市 BankArt にて展示）

4-4. 長沼グランピングプロジェクト

札幌や新千歳空港からほど近く、石狩平野を一望できる馬追丘陵に計画した小規模なグランピング施設である。グランピングとはグラマラス（豪華な）とキャンプを掛け合わせた造語で、コロナ禍のなか、密を避けて楽しむことができる場として浸透した宿泊施設のこと。この施設は筆者が設計監理を行い、施設内には管理棟のほか、四阿を併設した宿泊可能なテント棟が2棟、さらにサウナ施設があり、様々な空間で自然に浸りながらリラックスした時間を過ごすことができる施設を目指した。特にテント棟はホテルのような快適さを兼ね備えた施設として設計をし、シャワーやトイレ、キッチン等を完備、自然に浸りながらも快適に楽しむことができる施設として、類似施設とは一



図 4-2 施工者指導のもとグランピング用テントの建設ワークショップに参加



図 4-3 完成した内観写真 キッチン等水廻りも完備



図 4-4 2023年11月に完成したグランピング施設の外観

線を描く建築物となっている。向井ゼミの学生は、計画初期段階から基本計画や基本設計を題材とした課題に取り組んだほか、横浜国立大学OBによる展覧会「初出展 05」に出展するための模型制作、さらにはドームテントの建設現場に参加するワークショップを行なった。

□プロジェクト概要

- ・場 所：長沼町
- ・オーナー：株式会社福座
- ・施設用途：宿泊施設（グランピング施設）
- ・施設規模：鉄骨造平家建
- ・プロジェクト期間：2021年10月～2023年11月
- ・プロジェクト内容：グランピング施設の設計・建設
- ・対象学生：向井ゼミ所属 2年生・3年生 計28名
- ・作業内容：基本計画・模型制作・建設への参加

□実践教育の内容

実践① 実際の敷地・建物を対象としたプロジェクト

→実施を前提とし、様々な課題を踏まえた課題。実施設計図を用いた模型の製作。

実践③ 1/1スケールで考える

→ドームテント建設ワークショップを開催。建築が立ち上がるダイナミックな現場を体感した。

4-5. 屋台プロジェクト

北広島市ではボールパーク開業により訪れる人が急増しているものの、街を素通りしていることが散見されるため、来訪者が街に滞留できる場所を創造し、ボールパーク来訪者と北広島市をつなぐきっかけとなるため、屋台やポップアップストアに注目している。ゼミでは北広島市駅周辺にて屋台を活用したポップアップストアの実証実験を行う計画だ。そこで、実際に学生と街を歩き、屋台が展開できそうな余剰空間をリサーチしつつ、屋台のデザイン・製作から取り組むこととした。予算も限られる中で、ホームセンターなどでも手に入る量産材を用いて、搬出入の容易さやデザイ



図 5-1 北広島駅とボールパーク周辺を事前調査

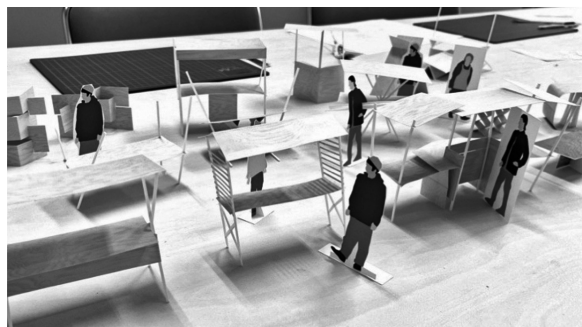


図 5-2 模型を用いた屋台デザインの検討



図 5-3 ホームセンターで購入した屋台の材料



図 5-4 合板を組み合わせるための原寸大模型を作りディテールを確認



図 5-5 計 4 日間をかけ、屋台を製作、現場で細かい調整を加えながら、無事完成！

ン性を加味したデザインを学生と共に検討，合板を組み立てるだけで美しいデザインが立ち上がる屋台デザインを実際にDIYで製作した。今後，実証実験により，屋台の活用手法と効果を確認する計画だ。

□プロジェクト概要

- ・場 所：北広島駅周辺を想定
- ・オーナー：向井研究室
- ・施設用途：屋 台
- ・施設規模：木 造
- ・プロジェクト期間：2021年10月～2023年11月
- ・プロジェクト内容：屋台の設計・製作・活用
- ・対象学生：向井ゼミ2～4年生 計36名
- ・作業内容：北広島駅周辺のリサーチ，実現性を踏まえたデザインの検討及び製作

□実践教育の内容

実践① 実際の敷地・建物を対象としたプロジェクト

→北広島駅及びボールパーク周辺の余剰空間のリサーチ，空間の活用方法，駅前商店等にヒアリングを実施。

実践② 建主や地域住民など 学生や教員以外の第三者へのプレゼンを行う。

→駅前商店やエルフィンパーク管理者へヒアリングを実施。今後屋台を活用し，広くユーザー意見を集める予定。

実践③ 1/1スケールで考える。

→実際に工具を用いて，製作。

4-6. ワイナリーストリートデザインプロジェクト

北広島市富ヶ岡地区の起伏豊かな土地に葡萄畑が広がっている。ここはパーフェクトパートナー株式会社 末岡代表が所有するワイナリーで2026年のワイン生産開始を目指し，栽培・整備が進められており，その畑の中央には100mもの伸びやかな遊歩道も整備される予定で，この道のデザインを学生に提案してほしいと依頼をいただき，プロジェクトが始動した。このストリートデ



図6-1 デザイン対象となるワイナリー中央のストリート



図6-2 学生と実施した現地見学会



図6-3 3DCADやphotoshop，模型やスケッチといった様々な手法でデザインを検討

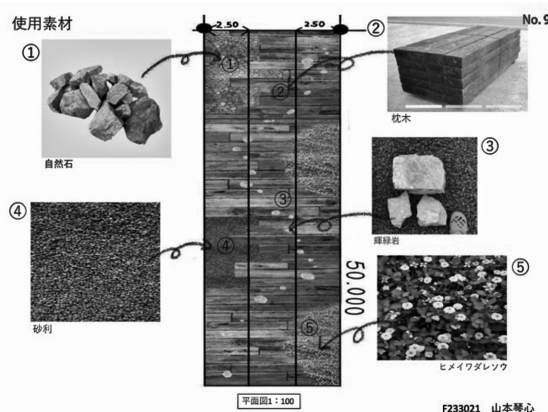


図6-4 実際に使う素材やその範囲を明示したプレゼンボード



図6-5 プレゼンテーション風景

ザインで求められたのは、ここに訪れた人が思わず写真を撮りたくなるような美しい景観を生み出すこと。フォトジェニックで、素材を活かした、実用的かつ魅力的なデザインを考案することである。

向井ゼミに所属する学生（基礎ゼミ1-2年生40名、ゼミ生3年8名）が、この印象的なストリートデザインに取り組んでいる。空間デザインを提案する上で、その土地を実際に体で感じる事が非常に重要である。そこで、学生たちと実際にこの美しいワイナリーの見学をさせていただいた。敷地の広がりや起伏、背後の景観、動線など様々な視点で、現地を確認し、現在提案をまとめているところである。この環境を最大限尊重しつつ、記憶に残る美しい景観につながるデザインを目指している。

□プロジェクト概要

- ・場 所：北広島市富ヶ岡地区
- ・オーナー：パーフェクトパートナー株式会社 末岡社長
- ・施設用途：ワイナリー
- ・施設規模：長さ100mのストリート
- ・プロジェクト期間：2023年9月～2024年2月
- ・プロジェクト内容：ストリートのデザイン
- ・対象学生：向井ゼミ所属 1-3年生 計48名
- ・作業内容：現地及び周辺のリサーチ、建物オーナーヒアリング、利活用方法とデザイン検討、オーナーへのプレゼン

□実践教育の内容

実践① 実際の敷地・建物を対象としたプロジェクト

→実施を前提としたプロジェクト。現地見学会を実施。また提案資料と共に、積算資料を各自作成し、コストも意識した提案を行う。

実践② 建主や地域住民など 学生や教員以外の第三者へのプレゼンを行う。

→ワイナリーオーナーへのプレゼンを予定。

実践③ 1/1スケールで考える。

→実際に現地を歩き、材料を手にとって、舗装などのデザインを検討。

5. ゲスト講師を招聘した建築デザイン教育

多くの大学では設計演習で製作された作品を客観的かつ多面的な視点によって講評するため、講評会にて学外で活躍する建築家をゲスト講師として招聘することも多い。新型コロナ流行を契機としたオンラインミーティングの一般化により、今までは参加が叶わなかった道外などで活躍する建築家やクリエイターにオンラインを活用して講評会に参加いただくことが可能となった。そこで、前述の実施を前提としたプロジェクトに加え、設計演習のような仮想プロジェクトにおいても学生の作品講評会に学外で活躍する建築家等に参加頂いた。また、講評と合わせて、各講師が現在進行中のプロジェクトなどもレクチャーいただいた。ゲスト講師による熱量ある生きた言葉によって、学生は大きな刺激を受けると共に、建築に対する多面的な視点や課題解決のアイデア、公共性や社会性を身につけるきっかけになったと考えている。その取り組み事例を簡単に紹介する。

5-1. 北広島エリアリノベーションプロジェクト

・基礎ゼミ I B ゲストレクチャー・講評会

北広島駅周辺をリサーチし、都市空間の課題やポテンシャルを把握した上で、自ら敷地を選定し、空間や用途をデザインするグループワーク。その最終発表会に、横浜を拠点に活躍されている建築家の玉田氏・脇本氏に御参加いただいた。

ゲスト

玉田 誠氏（建築家・横浜国立大学大学院設計助手）

脇本 夏子氏（建築家・日本女子大学非常勤講師）



図 7-1 玉田氏・脇本氏によるクリティーク風景

5-2. 学内コンペプロジェクト

2022年度より、1年生を対象に、空間デザインとプレゼンテーション能力向上のために学内コンペを実施している。このコンペでは空間デザインが身体・心に及ぼす影響や空間デザインの面白さ・重要性を理解してもらうため、「ととのう空間」という小さい空間のデザインに取り組んでもらった。その最終講評会にサウナクリエイターの板氏、建築家の和知氏に御参加いただいた。

・アクションプログラム I (2022) ゲストレクチャー

板 宏哉 氏

(サウナクリエイター・鶴居おもしろワークス株式会社代表取締役・現 鶴居村村議会議員)



図 7-2 板 宏哉 氏によるレクチャー風景。整う空間をデザインするというテーマに対して、プロサウナー・サウナクリエイターとしての経験を踏まえた特別レクチャー及び講評いただいた。

・アクションプログラム I (2023) ゲストレクチャー

和知 暖子 氏

(サウナクリエイター・建築家)

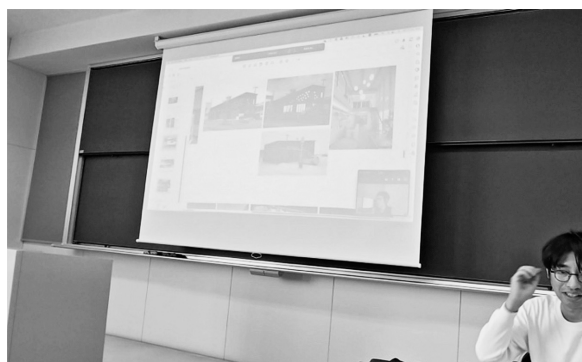


図 7-3 和知 暖子氏によるレクチャー風景。建築家として様々な用途規模の建築に携わってきた経験もレクチャーいただいた。

6. まとめ

星槎道都大学美術学部建築学科の教員として着任してからおおよそ3年間、北広島市を拠点に学生と共に様々なプロジェクトに取り組んできた経験から、建築デザイン実践教育がもたらす効果を以下にまとめる。

- ① オーナーや地域の人に伝わるデザインの体得
 学生には常に、他者に伝わる建築デザイン、そしてプレゼンテーションとなるよう繰り返し指導した。また、学生同士でディスカッションを積極的に取り入れるなど、建物のオーナーや地域住民など、建築のプロではない方にも直感的でわかりやすいプレゼンテーションとなることを心掛けた。表現方法においては3DCAD や illustrator, Photoshop, ペンタブレットや生成 AI など、様々なものを組み合わせながら、伝えたいことを表現できるよう、PC スキルの習得にもつながった。こちらのおすすめ案と相手が共感した案に乖離があることも多々あり、その点も含めて実践教育特有の発見も面白い。

② 実課題に取り組むことによるモチベーション向上

提案を求められ、オーナーや地域の抱える課題を解決することは、私たちにとって大きな動機づけとなった。また建築が実現することを前提とすることにより、地域や建築と正面から向き合い、より良い提案をつくらうというモチベーション向上につながったと考えている。誰かの役に立つというモチベーションにより、様々な課題を乗り越え、結果として学生のより良い成長につながったと考えている。

③ 社会から求められる自らの役割を理解

一般的に自分の力や役割は、自省だけで理解することは難しい。他者や環境との関わりの中から、自分の力や役割を理解する。プロジェクトを通して、実社会のニーズや自らの力量を理解し、自分が身につけるべき事を理解する。

④ プロジェクト遂行を通し、設計実務を学ぶ

実施を前提としたプロジェクトを遂行する過程で、一般的に建築設計演習ではあまり扱わない、施主の要望整理やコスト管理、プレゼンテーションのコツなど、設計実務で求められる能力を身につける。

⑤ 実空間を通して建築の持つダイナミズムを理解

マンションデザインプロジェクトや長沼グラン

ピングプロジェクト、屋台プロジェクトでは、学生が関わったデザインが実現するところまで学生と共にし、感動を共有することができた。建築として街や自然に、1/1 スケールで立ち現れ、様々な人に使いこなされている様子を見た時、今までの苦勞が吹き飛び、忘れ難い喜びを覚える。この経験を通じて建築や空間のチカラを感じてもらうことが最大の目的と言っても良い。

⑥ 実践は各種メディアを通して社会へ広く公開

各プロジェクトは大学のブログや広報などを通じて広く公開するとともに、新聞やテレビといったマスメディアを通じて多くの方に知っていただいた。学生達の努力や成果を知ってもらうことは、学生のモチベーション向上につながる事を期待している。

以上のように実践教育を通じて様々な効果が期待できる。ここで得られた実践的な経験は、今後、学生達が社会に出て直面する課題解決の手がかりとなる事を期待する。またいずれのプロジェクトも、教育の枠を超えて地域発展に資する未知なるデザインへの探究心を持って学生と共に取り組んだものばかりで、私にとっても気づきの多い時間となった。

最後に、多くの創造と学びの機会を提供し、支援していただいたすべての方に、心から感謝の意を表します。

The Significance of Practical Architectural Design Education in the Real World

～An Overview of Seven Case Studies～

MUKAI Masanobu

Abstract

As Japan faces various challenges such as population decline and economic stagnation, there is a growing expectation for architecture and urban spaces to contribute to regional revitalization. In this context, the opening of the “F Village” ballpark in March 2023 in Kitahiroshima City has created new patterns of human movement, turning the city itself into a grand social experiment. During my three years as a faculty member of the Architecture Department at Seisadohto University, based in Kitahiroshima City, I have worked with students on practical projects. Although the missions requested by the region vary and lack consistency, each project is undertaken with the assumption of social implementation. By organizing and overviewing these cases, including their design processes, I aim to elucidate the significance of practical education in architecture.